



位相

同じ出来事が、  
別のものとして現れることがある。

出来事は変わらない。

けれど、人が立っている場所がずれると、  
そこに現れているものは、静かに入れ替わる。

時間が癒すという話ではない。  
前向きになれば変わるという物語でもない。  
乗り越えたかどうかを測るための言葉でもない。

切なさが懐かしさに触れはじめるとき、  
何かが整理されたわけではない。

糧のように見えるときも、  
出来事が役立ったわけではない。

変わったのは、出来事ではない。  
それに触れている位置だけが、  
わずかにずれている。

同じ出来事でも、  
近すぎると、輪郭は鋭く立ち上がる。  
触れているのか、呑み込まれているのか、  
境界が曖昧になる。

少し離れると、  
手は届くままに、侵食されなくなる。  
そこにあるものは消えないが、  
重なり方だけが変わる。

さらにずれていくと、  
出来事はどこかに収まる。  
意味としてではなく、  
形をつくる材料のように。

意味は最初からそこにあったのではなく、  
その場所に立ったとき、  
遅れて現れる。

過去は変わらない。  
けれど、そこに現れているものはひとつではない。

触れたままの痛みも、  
距離を持った記憶も、  
形をつくる一部も、  
同じ場所に、同時に存在している。

どこに立っているかで、  
見えているものが変わるだけだ。



意味は、出来事の中ではなく、  
いま立っている位置から、遅れて立ち上がる。



Edition — 存在の芯  
別景：位相

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026